

共分散構造分析による、「親密性前線シフト仮説」の検証

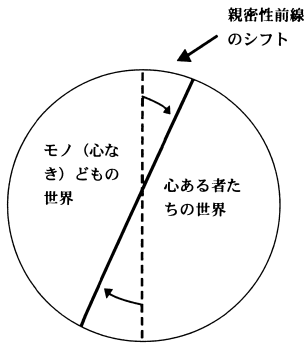
桜井芳生

0. 【要旨】

筆者自身が前稿（桜井2003）で提起した「親密性前線シフト仮説」を、共分散構造分析によって検証する。親密性前線シフト仮説とは、「いままで「心ある者」とされたものにたいして「心なきモノ」として認識するような「変化」が生じつつある。その一方で、相補的に、いままで「心なきモノ」とされたものにたいして「心ある者」として認識するという変化も生じている」という仮説である。筆者たち自身がおこなったアンケート調査をこの視点から分析する。この仮説を支持すると解釈しうる共分散構造分析のモデルが得られた。しかし、問題点がいくつか残存する。これらの問題点の克服が今後の課題である。結論として、当仮説は、現代文化・近未来を見通す上での索出的な視点として、保持するに値するものであると考える。

1. 【導入】

筆者は、（桜井2003）において、「親密性前線シフト」仮説という仮説を提起した。すなわち、遺伝子科学の発展や、ヒトゲノム計画の進展と、軌をいつにして、いままで「心ある者」とされたものにたいして「心なきモノ」として認識するような「変化」が生じつつあるのではないかと、いうことである。その一方で、いわば上にたいして相補的に、いままで「心なきモノ」とされたものにたいして「心ある者」として認識するという変化も生じている、



という仮説である。前稿（桜井2003）は、「序論・総論」の位置づけとして記述した。総論ということで、いろいろなトピックに浅く広くふれることになった。筆者が、本仮説のもとで照準しようとしているトピックはいくつかある。タイプとしては、二種類にわかれる。すなわち「旧来においては心なきモノであったものが、心ある者として処遇されるようになる」類型・と・「旧来においては心ある者

であったものが、心なきモノとして処遇される」という類型である。前者の例として、ロボット、とくに、ロボットペット、後者の例として、自分の身体への即物的（すなわち「モノ」としての）快樂追求・自分の身体への違和感、などを指摘した。この仮説を発想した学説史的前提などについては、前稿をご参照いただきたい。

この仮説をたしかめるため、筆者は、日本のある大学の学生さんたちを中心にアンケート調査をおこなった。この調査自体、「総論」としての前稿で紹介してしまった。しかし、総論としての前稿ではごく「予告編」的に触れるのみで、「別稿＝モノグラフを期す」と予告した。本稿で、モノグラフとして分析する所以である。このような執筆上の事情であるので、本稿の議論が、前稿と重なる部分も多いかとおもう。ご寛容を乞いたい。

2. 【対象と方法】

この調査は、2002年6月に九州のある地方国立大学のおもに文科系の学生さんたちを対象におこなったものである。無作為抽出ではない、ので、以下の検定に関する記述はすべて、いわば参考、として読んでほしい。調査参加者（実行者）ならびに回答者のみなさんに感謝する。（回収数188人。男性88人、女性99人、性別不明1人）。核になる設問は、以下の四つである。すべて、「強い肯定」から「強い否定」までの六段階の回答肢でおこたえいた

いた。

「最近、セックスの時に、いわゆる「大人のおもちゃ」のような電動性具をつかうひとがいるようですが、あなたは、どう感じますか？」（「バイブ肯定」と表記する。以下同様）。

「もし、まったく無害で習慣性のない、快樂をもたらす薬物（ドラッグ）が開発されたとしたら、それを利用することについて、どう思いますか？」（薬物肯定）。

「自分の体が自分のものではないように感じられる、といったようなことがありますか？」（自身体異和）。

「最近、ソニーの「アイボ」など、ロボットのペットを飼っている人がいますが、あなたがペットを飼うとしたら、どうおもいますか？」（アイボ肯定）。

また、旧来型（本来型？）の親密性へのコミットメントの多寡を計測するため、以下のような設問もおこなった。

「セックスには愛がともなっているべき、とおもいますか？」（セックス愛必要）。

「人間も遺伝子を複製する機械にすぎない」。こういう意見について、どう、感じますか？」（遺伝子機械嫌悪）。

「最近、売春を「セックスワーク」として、他の公序良俗に反しないことに条件に、許容する議論も一部であるようですが、あなたは、どうか感じますか？」（売春拒否）。

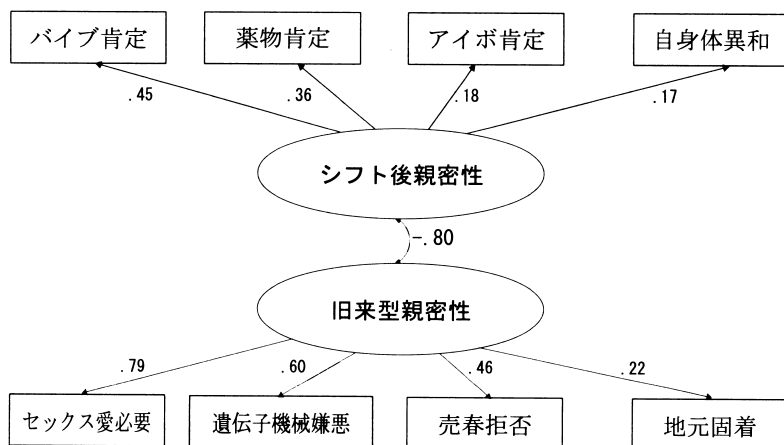
「あなたは、生まれ育った地元で、暮らしたいですか。それともいろいろな土地で暮らしてみたいですか？」（地元固着）。

これらの質問（変数）相互間の二変数の相関係数（ケンドールのタウ b）は、以下の通りである。（統計ソフトウェアは、SPSS 11.5 J ならびにAmos 5を使用した。）

		相関係数								
Kendallのタウ b		パイプ	AA薬物肯	AC自待真	DDアホ肯	tセックス愛	U遣子嫌	V売春	AV地元	
パイプ	相関係数	1.000	.147*	-.005	-.006	-.176**	-.203**	-.189**	-.140*	
	有意確率 (両側)		.012	.932	.922	.004	.001	.018	.016	
	N	187	186	187	177	187	187	187	187	
AA薬物肯	相関係数	.147*	1.000	.055	.091	-.177**	-.094	-.018	-.077	
	有意確率 (両側)	.012		.342	.177	.002	.165	.762	.183	
	N	186	186	186	176	186	186	186	186	
AC自待真	相関係数	-.005	.055	1.000	.095	-.055	-.072	-.061	-.015	
	有意確率 (両側)	.932	.342		.111	.359	.236	.386	.799	
	N	187	186	187	177	187	187	187	187	
DDアホ肯	相関係数	-.006	.091	.095	1.000	-.006	-.176**	-.023	.052	
	有意確率 (両側)	.922	.177	.111		.925	.005	.703	.383	
	N	177	176	177	177	177	177	177	177	
tセックス愛	相関係数	-.176**	-.177**	-.055	-.006	1.000	.312**	.257**	.088	
	有意確率 (両側)	.004	.003	.359	.925		.000	.000	.148	
	N	187	186	187	177	187	187	187	187	
U遣子嫌	相関係数	-.203**	-.094	-.072	-.176**	.312**	1.000	.213**	.074	
	有意確率 (両側)	.001	.165	.236	.005	.000		.001	.224	
	N	187	186	187	177	187	187	187	187	
V売春	相関係数	-.139*	-.018	-.061	-.023	.257**	.213**	1.000	.101	
	有意確率 (両側)	.018	.762	.386	.703	.000	.001		.087	
	N	187	186	187	177	187	187	187	187	
AV地元	相関係数	-.140*	-.077	-.015	.052	.088	.074	.101	1.000	
	有意確率 (両側)	.016	.183	.799	.383	.148	.224	.087		
	N	187	186	187	177	187	187	187	187	

3. 【結果】

これらの設問（変数）を、共分散構造分析にかけて得られたのが以下のモデルである（係数は標準化推定値）（誤差項は省略）。



適応度に関する諸指標は以下のとおりである。

適合度指標	Default model	飽和モデル	独立モデル
乖離度	22.718	0	3114.379
自由度	20	0	36
確率	0.303		0
パラメータ数	24	44	8
乖離度/自由度	1.136		86.511
規準化適合度指標 (NFI)	0.993	1	0
相対適合度指標 (RFI)	0.987		0
増分適合度指標 (IFI)	0.999	1	0
Tucker-Lewis指標 (TLI)	0.998		0
比較適合度指標 (CFI)	0.999	1	0

それぞれのパス係数の検定統計量ならびに有意確率は以下のとおりである。

		推定値	標準誤差	検定統計量	確率
セックス愛 ←	旧来型親密性	1			
遺子嫌 ←	旧来型親密性	0.874	0.119	7.332	0
売春 ←	旧来型親密性	0.612	0.109	5.601	0
地元 ←	旧来型親密性	0.33	0.125	2.64	0.008
パイプ肯 ←	シフト後親密性	1			
薬物肯 ←	シフト後親密性	0.751	0.257	2.92	0.003
アイボ肯 ←	シフト後親密性	0.35	0.203	1.719	0.086
自体異 ←	シフト後親密性	0.326	0.203	1.605	0.109

4. 【議論と結論】

上記のように、確率（いわゆる p 値。ただし、共分散構造分析では、通常の検定と棄却関係が「逆転」しているので注意）は、通常の有意水準の 5% を大きく上回り、適応度の諸指標（NFI から CFI）も、かなり「1」にちかい。このモデルは採用に値するモデルであると思われる。

パス係数もおおむね有意水準をクリアしている。表の下から二つのパスの確率が 5% 水準を上回っているのが気になるが、サンプル数の少なさを鑑みると、今後のより大きな規模での無作為抽出による調査に期待したいと考える。

共分散構造分析の利用にあたってはいくつかの留意しなければならない点があるだろう。

第一は、潜在変数（図の楕円の変数）の「命名」は結局のところは、分析者の恣意（勝手）であるということである。筆者の問題意識が上記のようであるので、筆者としては、上の二つの潜在変数について、「シフト後親密性」と「旧来型親密性」という命名をおこなった。しかし、この命名には、不可避性はない。筆者としては、上半分の四つの顕在変数を通底するものとして、また下半分の四つの顕在変数を通底するものとしては、このような二つの命名しか着想できなかつた。しかし、論理的には他の命名も考え得る。もし、説得力のある別の命名があるようだったら、ぜひ、ご教示いただきたい。また、このような他の命名の可能性、いいかえると、別の構成概念がありうることに鑑みて、（筆者の視点の説得力を増すために）さらに別の設問（顕在変数）をもいれて、このような図式がなりたつことを示し、筆者の仮説の説得力を増大させていきたい。

第二は、上記のモデルにおいて、上図のような、変数間の因果係数が導出できたとして、このモデルが、与えられたデータにたいする唯一のありそうなモデルとはかぎらない、ということである。共分散構造分析においては、通常は、複数の「競合」モデルをたてて、それらのうちから適合度がもっとも高いと評価できるモデルを選択するのが定石だろう。この点、このモデルは他の競合モデルとの比較はおこなっていない。しかし、本稿の「シフト仮説」自体、上記の諸変数にたいして、例の「シフト」が「最大、もしくは、唯一」の説明・原因であるとは主張していない。よって、この不備はわれわれの問題意識からは致命的とはいえない、とおもう。とはいえ、今後は、このモデルと「類似」したモデル、あるいは、本仮説とまったく関係ないモデル、さらには、本仮説を「反証」するようなモデルを、考案し、それらとの比較をおこなっていきたい。本稿の段階ではそれはできていない。今後の課題としたい。

第三は、とくに共分散構造分析につきものというわけではないが、一回だけのアンケートでは基本的には、「変化」は計測することはできない、ということである。上記のモデルでは、その点について、「同じ時点の調査諸変

数」でありながら、上半分の潜在変数を「シフト後」、下半分の潜在変数を「旧来型（シフト以前）」と、いわば強引に「時間的・前後」にわりふるといふ、いわば「便法」でもって、この難点を処理している。しかし、このようなやりかたは、論理的には必然性にもとづく推論とはいえない。この点、筆者は、満足しているわけではない。今後、ある程度時間が経過するのをまわって、同様な調査をおこなうことで、この「シフト」がさらに進展していく（はず）ことを実証的に追尾していきたいと考えている。

【結論】 以上のように、本調査ならびに、その共分散構造分析は、われわれの仮説にたいして、たかだか、「状況証拠」にしかならない。しかし、状況証拠的にとどまるとはいえ、他の視点では開かれぬような諸現象間の通底性が、本調査からは示唆された、と考える。そして、それによって示唆されたことは、われわれの仮説への支持でもある、と考える。本仮説は、現代文化ならびに、近未来の文化変容をみとおすうえで、索出的（ヒューリスティック）な仮説であると考ええる。

今後、本仮説の視点にもとづいて、本調査のような計量的調査をつづけていきたい。また、本調査のような計量的アプローチにとどまらず、いわゆる「質的調査」アプローチによっても、本仮説の可否を検証していきたいと考えている。

【文献】

桜井芳生2003 「「親密性前線」シフト仮説」『現代社会理論研究』第13号（現代社会理論研究会）

sakurai.yoshio @ nifty.com

[http:// member.nifty.ne.jp / ysakurai /](http://member.nifty.ne.jp/ysakurai/)